第六部　インマヌエルの書

イザヤ 7 章～12 章

□預言の背景とアウトライン

7 章から 12 章までの中で、「インマヌエル」ということばが 3 回出てくる。その意味は、「神が我らと共におられる」である。これは、メシアの呼称のひとつである。7 章から 12 章は、インマヌエルという呼称を持つお方であるメシアを預言する書である。

預言の背景：

イザヤが預言者として活動した期間に関係した南王国ユダの王は 4 代、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤであった。

この預言がなされたとき、南王国ユダは、ヨタムとその子アハズとの共同統治。表に出ているのはアハズ王 16 歳。このアハズ王に対して、北方から、アラムと北王国イスラエルが連合して攻めて来た。というのは、アラムと北イスラエルは、東の強国アッシリアの脅威に対抗して防衛同盟を結び、南ユダにも加盟するよう申し入れたが、南ユダのアハズ王が断ったからである。アラムと北イスラエルは、アハズ王を廃して、別の者を傀儡の王にし、自分たちの側に南ユダを取りこもうと計画したのであった。

アハズ王は決して信仰ある良い王ではなかった。しかし、アハズ王はダビデ王の子孫であり、南ユダにはアハズはじめダビデの子孫たちが住んでいる。主は、ダビデの子孫の中から、永遠の王となるお方、メシアを起こすと、ダビデに約束しておられた。これを「ダビデ契約」という。メシアはダビデの家から生まれるのである。

もし、ここでアハズはじめダビデの子孫たちが攻撃され、ダビデの家が滅びるなら、神の約束はどうなるのか。このような危機的状況が、インマヌエルの書の時代背景である。

アウトライン：　C)、D)、E）はイザヤ親子の名と関連する預言（8：18）

A)　インマヌエルのしるし（処女から生まれる）　7：1～25

B)　インマヌエルについての 4 つの預言　8：1～9：7

C)　神の伸ばされた御手　9： 8～10：4
（神がアッシリアを用いて北イスラエルを裁く）

D)　アッシリアに対する裁き　10：5～34
（レムナントについての預言を含む）

E)　インマヌエルによる統治　11：1～12：6

次男マヘル・シャラル・ハシュ・バズ
【分捕り物はすばやく、獲物はさっと】
長男シェアル・ヤシュブ
【残りの者が帰って来る】
父親イザヤ　【主は救い】

注意：この預言の中で、北イスラエルは、「エフライム」とも呼ばれる。
北イスラエル・・・エフライム族はじめ十部族、その首都はサマリア。王は有力者交替
南ユダ・・・・・・ユダ族とベニヤミン族、その首都はエルサレム。王はダビデの家系

□A）インマヌエルのしるし　のアウトライン

1. ダビデの家に対する脅威（7：1～2）
2. アハズ王に対するメッセージ（7：3～9）
3. ダビデの家が守られることについてのしるし（7：10～17）
4. アッシリアが南王国ユダを攻撃することに関する預言（7：18～25）

A）　インマヌエルのしるし　7：1～25

1. ダビデの家（南王国ユダの王家、ダビデ王の家系）に対する脅威　7：1～2

1 節　**ウジヤの子のヨタムの子、ユダの王アハズの時代、アラムの王レツィンと、イスラエルの王レマルヤの子ペカが、戦いのためにエルサレムに上って来たが、これを攻めきれなかった時のことである。**

- 紀元前 735 年、アハズ王 16 歳。父のヨタム王はまだ存命であるが、共同統治者として実権を譲り受けた年であった。このとき、北イスラエルの王はペカ、その治世第 17 年（Ⅱ16：1）。なお、Ⅱ列 16：2、「20 歳で王となり」とあるのは、父のヨタム王が死んで、アハズが単独統治者となったとき。
- アラム軍は、南に回り込んでエイラトを占領した（Ⅱ列 16：6）。北イスラエル軍は、エルサレムを攻撃したが、落とせなかった（Ⅱ列 16：5）。

2 節　**ダビデの家に「アラムがエフライムと組んだ」という知らせがもたらされた。王の心も民の心も、林の木々が風に揺らぐように揺らいだ。**

- 次はアラム軍と北イスラエル軍が合流して、エルサレムを攻撃してくるようだとの情勢報告があった。南ユダの人々は動揺した。

2. アハズ王へのメッセージ　7：3～9

3 節　**そのとき、主はイザヤに言われた。「あなたと、あなたの子シェアル・ヤシュブは、上（かみ）の池の水道の端、布さらしの野への大路に出向いて行ってアハズに会い、**

- 主はイザヤに、まだ幼い息子も連れてアハズ王に会いに行くよう命じた。

4 節　**彼に言え。『気を確かに持ち、落ち着いていなさい。恐れてはならない。あなたは、これら二つの煙る木切れの燃えさし、アラムのレツィンとレマルヤの子の燃える怒りに、心を弱らせてはいけない。**

- 木切れ・・・アハズ王が恐れているアラムと北イスラエルは、神の目からは、木切れ、それも燃えて煙っている燃えさしで、わずかな力で砕ける、そのような弱いものである。恐れてはならない。

5～6 節　**アラムは、エフライムすなわちレマルヤの子とともに、あなたに悪事を企てて、「われわれはユダに上ってこれを脅かし、これに攻め入ってわがものとし、タベアルの子をその王にしよう」と言っているが、**

- アラムと北イスラエルは、南ユダを属国とし、ダビデの家系の王家を廃して、タベアルという人の息子を傀儡の王にしようと計画していた。その目的は、南ユダの富を手に入れ、南ユダの兵士たちを自陣営に取り込むことで、東の強国アッシリアに対抗しよう、ということ。

7 節　**神である主はこう言われる。**
それは起こらない。それはあり得ない。
アラムのかしらはダマスコ、そのダマスコのかしらがレツィンだから。
―エフライムは６５年のうちに、打ちのめされて、一つの民ではなくなる―
エフライムのかしらはサマリア、そのサマリアのかしらがレマルヤの子だから。
あなたがたは、信じなければ、堅く立つことはできない。』」

- 神である主・・・イスラエルの神、エルサレムの神殿に臨在される神、ダビデの家系からメシアを起こし永遠の王国とすると約束された神
- アラムの首都はダマスコ、その町のかしらはレツィン。北イスラエルの首都はサマリア、その町のかしらはレマルヤの子ペカ。彼らの首都はエルサレムではない。彼らの王はダビデの家系ではない。
  だから、アラムや北イスラエルの思惑で、ダビデの家系を廃するなど、起こるはずがない。それはあり得ない。
- ６５年のうちに・・・この預言は紀元前 735 年。北イスラエルの首都サマリアがアッシリア王サルゴンⅡ世の攻撃によって陥落したのは紀元前 722 年から 721 年の頃。その後、アッシリア王エサルハドンによって北イスラエルの人々が捕らえ移されたのは紀元前 670 年。まさに預言から 65 年後。
- アハズ王と王家の人々は、ダビデ契約が必ず成ると信じて神に信頼しなかれば、堅く立つことはできない。

3.　ダビデの家が守られることについてのしるし　7：10～17

(1)　しるしを求めよ　7：10～11

10～11 節　**主はさらにアハズに告げられた。「あなたの神、主に、しるしを求めよ。よみの深みにでも、天の高みにでも。」**

- アハズは信者ではなかったが、神の民の王という立場において、主は関わってくださる。主はアハズに、どんなことでもよいので、しるしを求めよと命じられた。それが地の下で起きることであっても、あるいは天に現れることであっても、である。

(2)　拒否するアハズ　7：12

12 節　**アハズは言った。「私は求めません。主を試みません。」**

- アハズは、申命記 6：16 を引用して断った。「**あなたがたの神である主を試みてはならない。**」
- 申命記 6：16 は、人の側に、「神を試みるな」、「神にしるしを求めるな」と命じるもの。今回のケースにはあてはまらない。今回は、神の側から、「しるしを求めよ」と命じておられるからである。
- なぜ、アハズは拒否したのか。預言者イザヤが来て言っていることは、アラムや北イスラエルを恐れるな、主を信頼せよ、である。アハズは、主を信頼する気はない。東の強国アッシリアと手を組めばいいと考えていた。だから、これ以上、預言者イザヤの言うことを聞く気はなかった。

(3)　ダビデの家に対して与えられるしるし　7：13～14

13～14 節　**イザヤは言った。「さあ、聞け。ダビデの家よ。あなたがたは人々を煩わすことで足りず、私の神までも煩わすのか。それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。**」

- これはアハズ王個人に与えられるしるしではない。「あなたがたに」、すなわち「ダビデの家」に、与えられるしるしである。
- ダビデの家系のある女性が、それも処女でありながら、みごもって男の子を産む。その子の名は、インマヌエル「神が我らと共におられる」と呼ばれる。
- それまでは、ダビデの家系が途絶えるとか、誰がダビデの家系かがわからなくなるとか、そのようなことは起きない。今、アラムや北イスラエルが計画しているような「タベアルの子を王にする」など、起きるはずはない。

(4)　アハズに対して与えられるしるしと警告　7：15～17

次のしるしと警告は、アハズ王個人に与えられるしるしと警告である。「あなたがた」ではなく、「あなた（単数形）」と主が言う。

15～16 節　**この子は、悪を退けて善を選ぶことを知るころまで、凝乳と蜂蜜を食べる。それは、その子が悪を退けて善を選ぶことを知る前に、あなたが恐怖を抱いている二人の王の土地が見捨てられるからだ。**

- この子・・・イザヤがいっしょに連れて来た自分の子。この子が大きくなる前に、アラムと北イスラエルは没落する。

17 節　**主は、あなたとあなたの民とあなたの父の家に、エフライムがユダから離れた日以来、まだ臨んだこともない日々をもたらす。それはアッシリアの王だ。」**

- エフライムがユダから離れた日・・・約 200 年前、イスラエル王国が、北イスラエルと南ユダに分裂した日。エフライム族を中心とする十部族がユダ族ダビデの子孫による統治に反対して分離独立した。紀元前 931 年頃。
- 南ユダは、北イスラエルが分離独立して離れていった後、これまでに 4 度、外国の侵略を受けた。まずエジプト（Ⅰ列 14：25～26、Ⅱ歴 12：2～9）、次にエチオピア（Ⅱ歴 14：9～15）、3 番目にモアブとアモンの連合軍（Ⅱ歴 20：1～30）、4 番目にペリシテ人とアラブ人の混成部隊（Ⅱ歴 21：16～17）。今回は、それらよりももっとひどい侵略を受けるという警告である。
- いまだかつてない危機が、南ユダに迫る。それはアッシリアの王がもたらす、と警告される。このとき、アハズはアッシリアを頼りにしようと考えていた。主を信じないでアッシリアと組む、この判断が大きな危険をもたらす、と警告されたのである。

4.　アッシリアが南ユダを攻撃することに関する預言　7：18～25

(1)　17 節の警告【アッシリアが南ユダを攻撃する】について詳しく預言（18～20 節）

18～19 節　**その日になると、主はエジプトの幾筋もの川の果てにいるあの蠅、アッシリアの地にいるあの蜂に合図される。すると彼らはみなやって来て、険しい谷、岩の割れ目、あらゆる茨の茂み、あらゆる水飲み場に巣くう。**

- 蠅はエジプト軍、蜂はアッシリア軍。両軍が激突するが、戦場となるのは、南ユダの国土。

20 節　**その日、主は大河の向こうで雇ったかみそり、アッシリアの王を使って頭と足の毛を剃り、ひげまでも剃り落す。**

- アッシリア軍はエジプト軍を破る。さらに、南ユダにも襲いかかる。
- 大河の向こう・・・ユーフラテス川の向こう。アッシリアの地域。
- 雇ったかみそり・・・アハズ王は金銀をアッシリアに送り、アラムと北イスラエルから救ってくれるよう依頼した（Ⅱ列 16：7～9、Ⅱ歴 28：16）
- 頭と足の毛を剃り、ひげまでも・・・雇ったつもりが、自国にまでかみそりが当てられることになる。ひげまで剃り落されるとは、最大の侮辱を意味する。

(2)　この攻撃を受けた結果、国土が荒廃することの預言（21～25 節）

21～22 節　**その日になると、一人の人が雌の子牛一頭と羊二匹を生かしておく。これらが乳を多く出すので、彼は凝乳を食べるようになる。この地に残されたすべての者が凝乳と蜂蜜を食べるようになる。**

- 養うことのできる家畜の数が限定される。かろうじて凝乳が作れるように各家に雌の子牛１頭、羊二匹だけである。肉にして食べるような家畜は持てない。

23～25 節　**その日になると、銀千枚に値する、ぶどう千株のある地所もみな、茨とおどろのものとなる。全土が茨とおどろになるので、人は弓矢を持って、そこに行く。鍬で耕されたすべての山にも、あなたは茨とおどろを恐れて、行かない。そこは牛が放たれて、羊の踏み歩く場所となる。**

- ぶどう畑も小麦畑もなくなる。全土が茨とおどろに覆われてしまう。作物は取れないので、狩猟で獲物を求める地域になってしまう。かつては鍬で耕されていた山も荒れて、牛の放牧地、羊が踏み歩く場所となってしまう。